全国結核予防婦人会だより

発行●社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会
〒101-0061 東京都千代田区三崎町1-3-12 TEL 03-3292-9211

2010.3
No.98

2009年度
複十字シール図案
デザイン:安野光雅画伯

健康の輪

健康日本21

編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局（結核予防会普及課内） 題字●初代会長 廣瀬勝代

第14回結核予防関係婦人団体中央講習会開催

平成22年2月17日から2日間、東京都目黒区の「こまばエミナース」にて、第14回結核予防関係婦人団体中央講習会が開催されました。今年も結核予防会総裁秋篠宮妃殿下よりお言葉を賜り、各種講演、班に分かれての情報交換会と、濃密で充実した内容でした。全国各地からお集まりいただいた116名の参加者の皆さんは、ともに結核のこと、生活習慣病のことを学びました。（関連記事2ページ）

（開講式にてお言葉を述べられる秋篠宮妃殿下）

第14回結核予防関係 婦人団体中央講習会お言葉

平成22年2月17日（水）

本日、第十四回結核予防関係婦人団体中央講習会の開講式にあたり、日頃から熱心に結核予防活動を進めておられる皆さまにお会いできましたことを大変うれしく思います。

昨年、財団法人結核予防会が創立七十周年という大きな節目を迎えました。結核予防活動の歴史をふり返りますと、婦人会が果たしてこられた役割には誠に大きいものがあります。結核予防の普及活動、複十字シール運動をはじめ、広く公衆衛生に関わるさまざまな意義深い活動を積極的に展開されてきた皆さまのたゆまぬご努力に対して深く敬意を表します。また、婦人会の方々が、結核予防会やストップ結核パートナーシップ日本などとともに、国内外の結核撲滅のため、国際協力事業にも貢献されていることを非常に心強く思います。

結核は、決して過去の病気ではありません。特にアジアやアフリカにおいては主要な感染症として、今日も猛威を振るい続け、これらの国々における経済的な貧困の大きな要因のひとつになっております。また、日本も、依然として中蔓延国に位置しております。わが国の結核事情を見ますと、結核の罹患率は減少しておりますが、依然として主要な感染症のひとつです。結核患者の高齢化や合併症を有する患者の増加など、結核問題は複雑化するとともに、質的な変化を見せています。日本のこのような状況の下で結核をなくすためには、ゆるみなく結核対策を進めていく必要がありましょう。

毎年、この時期に開催される中央講習会には、全国から百名以上の参加者があり、それぞれの地域における活動内容をより良くするために、積極的に知識の習得に努め、活発な意見交換をされてきました。今年も二日間にわたる講習会で、結核、複十字シール運動、肺の生活習慣病であるCOPD対策、婦人の健康・更年期対策や子宮けい癌予防などについての講演がおこなわれると伺っております。

本講習会に参加されるお一人お一人が、これらのテーマについて一層理解を深め、実り多い交流がおこなわれますことを希望いたしますとともに、皆さまがその成果を十分に活かして、これからも、人々が健康に過ごせるための活動に力をつくされますよう願い、開講式によせる言葉といたします。

写真で振り返る

第14回 結核予防関係婦人団体中央講習会

平成22年2月17日～18日　こまばエミナース（東京都目黒区）

毎年、この時期の恒例になりました中央講習会が、下記のスケジュールで開催されました。

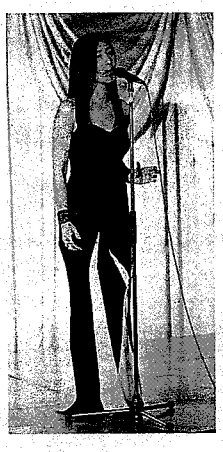
講習会のいくつかの場面を写真で振り返ってみたいと思います。

第１日目

午後１時より秋篠宮妃殿下ご臨席のもとに開講式が開かれ、次いで国際保健から見た婦人会への期待、結核予防婦人会について、複十字シール運動について、元患者の体験談、肺の生活習慣病、更年期のヘルスケアー、何が何でも元氣が一番、の講義が行われました。

熱心に質問をされている様子

懇親会では、ソプラノ歌手のYuccaさんが特別出演され、美しい歌声のプレゼントがありました。気さくにサインや記念写真に応じてくださいました。



第２日目

早朝より、子宮頸がん予防について、ワッハッハッ体操、の講義に次いで全国結核予防婦人会30周年のＤＶＤが上映されました。

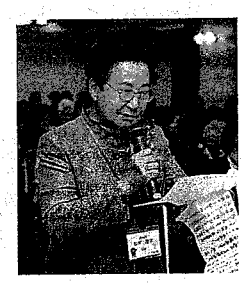
浅野氏によるワッハッハッ体操の指導

子宮頸がん予防の講演中に、女優の仁科亜季子さんが、特別参加され、体験談をお話くださいました。

その後は、班に分かれて情報交換会が開かれ、各地の婦人会活動について活発に意見が交わされました。

次いで終講式が行われ全員で蛍の光を斉唱し、講習会の最後を締めくくりました。

積極的な発言が数多くでました



終講式では素晴らしい謝辞を述べて下さいました。

中央講習会スケジュール

2月17日（水）

開講式　13:00～13:30
- 主催者挨拶　結核予防婦人会会長　中畔　都舎子
- 主催者挨拶　結核予防会会長　青木　正和
- 総裁お言葉　秋篠宮妃殿下
- 来賓挨拶　厚生労働省健康局長
- 「健康の歌」斉唱

写真撮影　13:40～15:55

講演１　14:00～14:30
「国際保健から見た婦人会への期待」
財団法人結核予防会顧問　尾身　茂

講演２　14:30～15:30
「結核予防婦人会について」
「複十字シール運動」
全結婦連事務局長　山下　武子

講演３　15:30～15:45
「元患者の体験談」
結核予防会普及課員　成瀬　匡則

講演４　16:00～16:20
「知っていますか？COPDについて→タバコ病」肺の生活習慣病
COPD共同研究員　加藤　久幸
「肺年齢→COPD DVD（TBS）」　16:20～16:30

講演５　16:30～17:20
「更年期のヘルスケアー（豆知識）」
小山崇夫クリニック院長　小山　崇夫

講演６　17:20～17:50
～何が何でも元氣が一番～
東洋医学情報センター・NPO法人いたごち専務理事
藤井　弘泰

2月18日（木）

講演７　8:30～9:30
「子宮頸がんは予防できる」
― 子宮頸がん予防ワクチンを中心に ―
自治医科大学産婦人科学講座　鈴木　光明

講演８　9:30～10:00
「ワッハッハッ体操」
特定非営利活動法人健康生活研究会副理事長
浅野　有信
「全国結核予防婦人会30周年ＤＶＤ」　10:00～10:20

班別情報交換会　10:30～11:30

終講式　11:30～12:00

～年寄りが重病を病んで～

結核予防会
会長　青木 正和

2年半前のこと、札幌市の結核予防婦人会で「結核を病んだ人たち」の話をする予定の半月前、以前からの高血圧症が悪化し、精査の結果「副腎が悪いための高血圧（アルドステロン症）なので入院手術が必要」という厳しい診断。自分でも前々から疑っていたが，医者のくせに開腹手術が怖く、何とか言っては逃げていた。しかし検査結果を見ると、手術に合意せざるを得なかった。すぐに家に電話、家内はびっくり仰天、それでもとにかく入院手術の準備を頼むほか無かった。

入院は予防会の病院、従ってすべて信頼できる友人なので心配ないが、自分では何も出来ず、ただ任せるほか無かった。不安と心細さは看護師と家族が支えてくれた。退院しても、長く患った高血圧のため腎機能が悪く、厳しい食事療法が必要だった。家内は栄養士さんの細やかな指導を受けて食事を作り続けているので2年半たった今も無事で仕事をしている。

医者になって56年、ずっと結核、肺癌など呼吸器疾患の仕事を続けてきた。診療、研究、論文執筆と忙しい毎日を送り、ずいぶん努力してきた積もりである。しかし80歳を越えて重病になると、毎日をどう生きるべきか考えさせられる。老年医学の教授だった大學の同級生は，「元気で高齢にまで達した人に共通の特徴はただ1つ、前向きな人柄と楽天的な性格だ」という。そして具体的には次の3原則を勧めている。①動くと言うこと．“Use it or lose it”（動かなければ駄目になる）。②楽しむということ。「知者は惑わず。仁者は憂えず。（論語）」。③喜ばすということ。人間は1人では生きていない。この3原則はもっと詳しく書きたいが、紙数の都合で割愛させて頂く。しかし、この3つの言葉によって、まもなく83歳になる老人が元気に毎日を送り、楽しんでいるのである。お裾分けしたいと思い、雑文を書いた次第である。

婦人会事務局だより

子宮頸がん市民フォーラム
「子宮頸がんは予防する時代です！」

自治医科大学産婦人科学講座
教授　鈴木 光明

2009年12月6日(日)に都市センターホテルコスモスホールにおいて、465名の参加を得て、標記フォーラムが開かれました。子宮がん自体の知識が浸透していない現状を踏まえ、「唯一予防できるがん」としての子宮頸がんについて、基調講演と患者の声、最後にパネルディスカッションが行われました。

日本医学会の高久史麿会長から、ワクチンといえば、新型インフルエンザをはじめとする感染症に有効という認識をお持ちの方も、子宮頸がんに有効なワクチンがあることはご存じない。しかしこれはがん対策の上でも画期的なことであるというお話がありました。

続いて、自治医科大学産婦人科学講座の鈴木光明教授から、若い女性に増えている子宮がんとその対策について、基調講演がありました。子宮がんには、子宮体がんと子宮頸がんの2種類あり、そのうち子宮頸がんは6割近くに出血もなく、20～39歳に多いとされていて、早くに子宮がん検診（細胞診）と子宮頸がんの原因となるヒトパピローマウイルス（HPV）の外殻を模して作られたワクチンを活用することで、子宮頸がんを制圧することができると説明されました。発症のメカニズムなどは、結核予防会機関誌複十字誌』329（2009年9月号28～29頁）に掲載されていますので、ご参照ください。

また、女優の仁科亜季子さんは、自分の体験を包み隠さずお話してくださいました。小学校に入学したばかりの子どもを持っていた38歳のときに発症し、抗がん剤、子宮摘出手術、放射線治療などを経て一応は回復されました。しかし更年期障害や再発への不安など日々のふとした場面でのつらい心情をお話になりましたが、現在女優に復帰され、様々な場面で自分の体験を話す機会を自分の使命と考えていますと明るく語られました。

最後のパネルディスカッションでは、民主党の小宮山洋子議員や新渡戸分科学園短期大学の中原英臣学長らを交えて、若い世代に子宮がん検診を受けてもらい、さらにワクチンの必要性を若い人だけでなく、いかにその母親・父親に教育していくことができるかを皆さんで議論しました。

欧米では10～20代に対して公費負担でワクチン接種が行われている事例も紹介されました。早く日本もそうなってほしいと思います。

◇ 平成21年地区別研修会 ◇

日時：平成21年11月12日(木)～13日(金)
場所：仙台市秋保温泉 ホテルニュー水戸屋

宮婦連健康を守る母の会

会長　三浦 絢子

紅葉に彩られた仙台の奥座敷秋保の里で開かれた幹部研修会には、県内外から200余名の参加の下、盛大に開かれました。

新型インフルエンザの流行期でもありましたので「肺炎の予防」のテーマで特別講演があり、続いて「結核の医療の現状と今後の課題」のテーマで結核フォーラムがありました。

医療機関の立場から２名、行政の立場から２名、結核で入院治療を受けられた患者、結核患者の家族の立場からと、６名のシンポジストで話し合われました。

宮城県には、10年前までは結核病棟をもっていた病院が七つもあったのですが、次々と閉鎖し、仙台赤十字病院も平成22年３月末には閉鎖になり、県北にある県立循環器センターただひとつの病院となるだけです。

わが国は、結核の中まん延国であり、宮城県では毎年新規患者が二百数十人にもなっています。患者の多くは高齢者で合併症もあり長期入院となってしまうということです。病院では、入院結核患者ひとり１日あたり１万円もの赤字を生じているとのことです。

結核病棟の入院料金は、一般病棟より非常に低い料金に決められている為、結核病棟を継続すると膨大な赤字となり、赤字経営に耐えられなくて閉鎖せざるを得ないとのことでした。

会場からは、大きなどよめきと共に、診療報酬をあげてもらうなどの署名運動をするなどの声があがりました。結核は過去の病気ではなく、新患が増加していることなどからも複十字シール運動を多くの人々に理解してもらうよう努力していかねばならないと思いました。

翌13日は、「伊達政宗と仙台藩の国づくり」と題して元図書館長の伊達宗弘氏よりの記念講演がありました。文武に優れた政宗のおいたちから戦国の世での国づくりの偉業について話されました。

辞世の句

“雲りなき　心の月を先だてて
　　浮世の闇を照らしぞ行く”

日時：平成21年9月17日(木)
場所：新潟県新潟市　新潟チサンホテル

新潟県食生活改善推進委員協議会

会長　外山 迪子

９月17日、新潟チサンホテルにおいて第９回関東甲信越幹部研修会が開催され、全員で「健康の歌」を歌い開会となりました。研修会のテーマは「複十字シール運動の歩み」でした。最初に財団法人結核予防会の山下事業部長様から講演をいただきました。結核は過去の病気と思われがちですが、発病しないまでも日本人の４人に一人が、全世界では３人に一人が結核菌を持っていること。そして１日に5000人の人が死亡し、800万人が新たに罹患しているとの事です。しかし現在普通に生活している私達にとっては身近に感じることはできませんが、一人でも多くの人達に関心を持ってもらう事や世界的にもっと注意を注いでいく事が大切とのことでした。

シンポジウムでは「複十字シールの活性化を目指して」と題し長野県、神奈川県、埼玉県の３県から取り組みが発表されました。知事への表敬訪問を行い各行政への理解も深め多方面からの啓発が必要とのことでした。街頭にたっての募金活動は地域の住民への啓発となる大きな活動です。そして郵便物や封筒にシールを貼り、少しでも多くの人達の目にふれるよう各県とも活用方法を工夫しているお話しをお聞きしました。地道な活動ですが、あらゆる場所や機会をとらえて取り組んでいく必要性を感じるとともに、結核予防にとても意義がある重要な役割を担っていることをあらためて知ることができました。特別講演「子宮がんの予防―子宮がんの検診はこう変わってきた」のお話の中にも子宮がんはゆっくり進行することや、健診を受けることで早期発見でき抑制できるとのことでした。結核予防やがん予防はあらためて日頃の健康管理が大切であることを確認いたしました。

私達はこれからも「自分の健康は自分で守る」ことの大切さを訴えながら、募金活動にももっと力を注いでいかなければと思っております。

イラスト：カワセミ
茨城よろこびの会　飯田則子

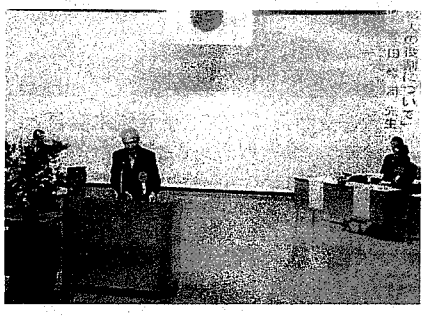
日時：平成21年3月7日(土)
場所：福岡県宮若市　マリーホール宮田

福岡県結核予防婦人会
副会長　熊谷 京子

宮若市婦人会会員240名の参加の中で結核予防講演研修会を開催しました。

財団法人結核予防会山下武子理事兼事業部長、福岡県鞍手保健福祉環境事務所平泰子健康対策課長のお二人を講師として、お招き致しました。

財団法人結核予防会久保カヨ子福岡県支部事務局長、福岡県結核予防婦人会木下幸子会長のお二人のごあいさつもいただき盛会の中研修会を開催しました。



山下武子先生からは、「結核予防活動の重要性とシール募金について」、平泰子先生からは、「鞍手管内の結核の現状について」、それぞれの分野でのお話しをしていただき、◎結核はどのような病気だろうか？○結核予防活動の重要性、○複十字シール運動の重要性、複十字シールの募金が発展途上国の人々の結核患者を助けている事もわかり、何げなくしていた募金の大切さを感じる事が出来ました。又、私達が生活している地域での結核の現状等々の身近なお話もしていただき、今まで気にもとめなかった結核という病気、毎年2万7千人が発病2300人が死亡という国内最大級の感染症である現実を知り、驚愕しました。その初期症状が風邪に酷似している為、気づかない内に、重症化するという、咳やたんが二週間以上続く時は、医者に診察を受ける事の大切さも、理解出来ました。予防策として、適度な運動、バランスのとれた食事、日々のストレスの解消の大切さも知った。頭では理解している様でも、ついついおろそかにしがちな、体の健康管理等を、改めて考えさせられる、たくさんの実りある研修会でした。

わが婦人会の自慢の活動

山口県結核予防婦人会の活動を通して思うこと
山口県結核予防婦人会
会長　林 登季子

一般の市民には「結核は過去の病気」と思われていますが、現在、特に高齢者や経済的弱者を中心に感染が広がりつつあります。当婦人会としては、きちんとした予防対策が必要であることを、皆さんに知らせ啓発することが大切だと考えています。

8月1日には全国一斉複十字シール運動開始に合わせて、会長・副会長と結核予防会支部長と県庁に知事表敬訪問を行いました。続いて県下17支部でシール運動を展開、地域の方々に結核の恐ろしさと予防の大切さ等を啓発しました。

次に9月23日には萩市内において地域の婦人会の方々と一緒にシールやグッズを街頭で配りました。今年は新型インフルエンザの流行もあったせいか、関心が深く、多くの子どもたちが参加してくれました。また柳井市では健康教室を開き、午前中はバランスのとれた工夫料理講習、午後は肺がん・結核疾患についての講義を開催しました。こうした活動は毎年県内一地域を選び行っており、自分の健康は自分で守ること、そして健康は家庭を明るくし、社会の健全につながることを地域から発信しています。

さて、健康法は人それぞれですが、私は水泳を続けております。一度に1キロの長距離をゆっくり泳いでおり、終わった時の爽快感や仲間との語らいも、継続する上での秘訣となっています。一人ひとりが健康で輝き続けることが重要だと考えています。特に超高齢社会を迎えるに当たり、皆が健康で長生きすることで、医療費抑制につなげることも大事ではないでしょうか。

国際コミュニケーション基金事業報告

結核予防会事業部
普及課員　冨名腰 あん

ストップ結核パートナーシップ日本（STBJ）は2月15日RIT/JATAフィリピン マニラ事務所において日本・フィリピン結核患者－ストップ結核！ワークショップを主催しました。これは日本とフィリピンの患者さんが語り合い、悩みを分かち、共に助けあおうという試みです。6名のフィリピン結核患者、2名の日本結核患者が参加しました。患者以外にRIT/JATAフィリピン事務所、(財)結核予防会、在フィリピン日本国大使館、マニラ新聞社の関係者が本ワークショップに出席しました。平成21年9月2日に世界銀行東京事務所で開いた日本・フィリピン結核患者テレビ会議に引き続き、結核患者の証言活動を支援するSTBJの活動の一環で、国際コミュニケーション基金（現財団法人KDDI財団）の助成を受けたものです。

フィリピンのトンド地区にあるカノッサ・ヘルス アンド ソーシアルセンター（NGO、以下カノッサセンター）は無料で結核の治療薬を提供している施設です。カノッサセンターで治療を受けた路上生活をしていたフィリピン結核患者は、カノ

ッサセンターで治療を受ける前は非常に痩せていたが、毎朝NGOで提供されている食事のおかげで薬を飲めるようになり回復することができたと話しました。また、カノッサセンターでは結核患者達は患者やボランティアが集まって治療や家族に関する意見交換の機会が持たれていると話しました。こうすることによって治療上の不安が軽くなり、脱落が防げると話していました。逆にMDR結核患者だった日本人結核患者は看護師などとのコミュニケーションの機会があまりなく心配だったとの発言がありました。本活動の成果としては結核患者達の国際交流、両国の患者達が感じているニーズや伝えたいメッセージを引き出すことができたことです。

ワークショップで取り上げられた内容は①結核の治療を受けた機関・団体について、②治療施設における結核患者同士のコミュニケーション、医師・看護師とのコミュニケーション、③結核患者のボランティア活動について、④結核の治療のためのコスト、⑤結核患者憲章について等でした。結核患者憲章については権利と義務の内容にフィリピン患者が関心・興味を示されている様子でした。最後に、全参加患者が1人ずつ結核に対する思い・メッセージを書き、全員の前で発表しました。

◇たばこ事務局だより◇

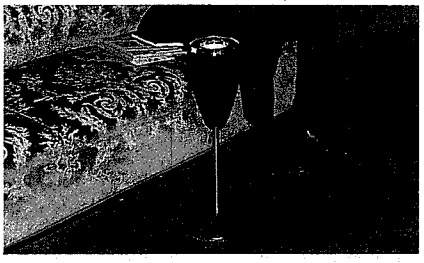
たばこ値上げの要請

たばこ病COPD患者の声を民主党副幹事長の元へ

平成21年12月8日(火)，10：35～11：00に国会議事堂内第15控室にて、一川保夫衆議院議員に要請を行いました。たばこの値上げに関する要望とともにぜひたばこ病COPD（慢性閉塞性肺疾患）と結核の患者さんの声を聞いていただきたいとお願いして、今回、実現しました。

当日は、足立サンソ友の会の駒木光雄会長、日本呼吸器障害者情報センターの遠山和子理事長、たばこと健康問題NGO協議会の島尾忠男会長、全国結核予防婦人団体連絡協議会の山下武子事務局長、そして結核予防会事業部普及課成瀬匡則さんがそれぞれ、思いのたけを届けました。さらに、駒木会長を取材中の読売新聞東京本社生活情報部の赤池泰斗記者も同席し、総勢7名で要請を行いました。

最初に驚いたのは、控室前のロビーには灰皿が並べられていることでした。あわててシャッターを押したので、写真をご覧下さい。



山下事務局長から、入り口の煙で少し息が荒くなってしまった駒木会長に代わり、今回のたばこ値上げの必要性、来年に先送りする危険性、母子手当をたばこ代に充てない努力を民主党の力で進めてほしいとお話されました。

さらに、駒木会長からは、自分の子ども（40代前後）にいくら言っても手遅れなので、若い世代、中学生から高校生に向けて、酸素を吸っている自分の姿を見せながら、禁煙教育を続けることの意味を理解していただき、たばこがお小遣いで手が届かない値段まで引き上げていただけるようにお願いされました。

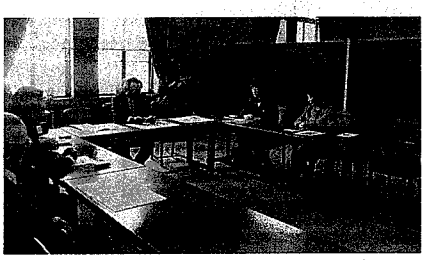
続いて、遠山会長から、昨年COPDで旦那様を亡くされたことをお話になり、最後の療養生活が、本人にもまた見まもる家族にも非常に残酷で、その苦しみを他の方に味あわせたくないと切々と訴えられました。

また、結核患者、若い元喫煙者を代表して、成瀬さんが、「やめたいと思っている人に契機になるはずです。たばこは覚醒剤やMDMAなどの麻薬と同じであるというスタンスで、たばこのパッケージから学校での保健教育などに力を入れてほしい」と話しました。

最後に島尾先生から、民主党が政権を取って、たばこを健康の問題として取り上げてくださったことに感謝しているとお礼を述べられ、ですから今こそ、たばこ値上げを英断していただきたいと強く要望し、本当に短い時間でしたが、私たちの思いを届けました。

一川議員も、本来農林水産省担当であるが、たばこも問題は十分理解しているつもりですし、このことは幹部にも挙げ、前進させていただきますとお話してくださいました。

要望書を手渡すCOPD患者駒木会長と受け取る一川議員



COPD患者の声を聞いてくださる一川議員

簡単に出来る家庭料理
チクワとカニカマのサラダ

材料（2～3人前）

チクワ	5本
カニカマ（海鮮棒、アラスカなど）	5～8本
マヨネーズ	適量
塩コショウ	少々

作り方

❶チクワを5ミリくらいの厚さで輪切りにする。

❷カニカマは手で細く裂いておく。
※あらかじめ裂けているものも売っているので、それを使用してもOK。

❸チクワ、カニカマ、マヨネーズ（適量）、塩コショウ（少々）を混ぜ合わせて完成!

コメント

・マヨネーズの量はお好みで調整して下さい。

平成20年度

結核予防婦人会COPD調査結果報告

全国結核予防婦人団体連絡協議会
事務局長　山下 武子

このたび全国結核予防婦人団体連絡協議会会員の皆様のご協力を得て、肺の生活習慣病COPD早期発見のためのアンケート調査を実施いたしました。調査票は65,813枚配布し28,996枚回収、内有効枚数25,185枚（86.9%）について集計しましたので報告いたします。

①有効総数25,185人中、
男性　7,798名（31.0%）、
女性　17,387名（69.0%）。
（図1）

②40歳以上喫煙の有無別では
喫煙あり　6,573人（26.1%）、
なし　18,612人（73.9%）
（図2）

③40歳以上喫煙あり6,573人中
男性　5,296人（80.6%）、
女性　1,277人（19.4%）
（図3）

④40歳以上喫煙あり
6,573人中COPD精密検査を要すると思われる（スコアー17点以上）人の割合は
男性　3,975人（60.5%）、
女性　740人（11.2%）
を占めていた。（図3）

⑤協力いただいた調査用紙の最も多い県は大阪19,036枚、次に宮城7,298枚、岩手934枚、福井929枚、青森381枚の順であった。他沢山の皆様のご協力頂き厚くお礼申し上げます。

結果：調査の特色として女性が約69%を占めていた。従って40歳以上の喫煙率も26%と低い値を占めたが、喫煙者6,573人の8割が男性、その6割はCOPD予備軍であることがわかった。予備軍となっている人々の早期受診勧奨が必要である。

今回は婦人会の調査であったため女性の占める割合が高くて、働く男性の数は少なかった。しかし、この調査から40歳以上で喫煙者、特に男性のCOPD早期発見が重要であることが示唆された。今後、事業所などで働く男性、40歳以上喫煙者のCOPD早期発見事業が急がれる。あわせて喫煙防止対策、禁煙支援事業など積極的に婦人会活動に取り入れていくことが重要である。

図1　男女割合と要精検率（25,185人）

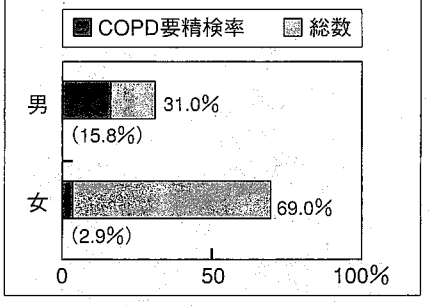


図2　男女割合と要精検率（25,185人）

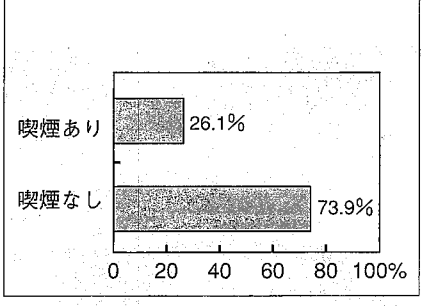
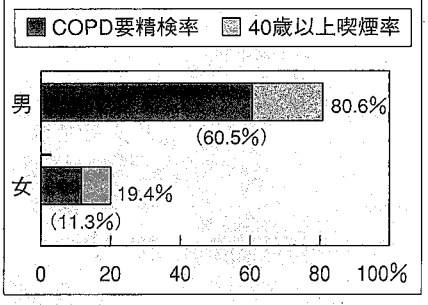


図3　男女別喫煙率とCOPD要精検者の割合（6,573人）



イラスト募集

平成22年7月号（健康の輪No.99）に掲載するイラストを募集致します。
花・動物・その他、何でも結構です。
締切は、**平成22年6月20日**です。

全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局宛
〒101－0061　東京都千代田区三崎町1－3－12
TEL：03－3292－9288

「子ども」

平成22年度複十字シールのご紹介

安野光雅先生の代表的なモチーフの一つが「子ども」であることは、皆さんご存知ですね。今年は、その「子ども」がテーマで、男の子と女の子が縄跳びや竹馬など、いろいろな遊びに興じている図柄が４枚です。周りに花々や動物がたくさんちりばめられているのですが、よく見るといろいろな仕掛けがされているところが安野流。シールでは小さくなりますが、どんな仕掛けがあるか、探してみるのもまた一興ですね。

安野先生ご自身、「描いていて楽しかった」とおっしゃったこの「子ども」、無心に遊ぶ「幼ごころ」をどうぞお楽しみください。

今年も皆さんのお手元から、複十字シールを通して、世界中に健康の輪が広がることを願って…。